平成 19 年 2 月 23 日

＜佐々木　朗＞

北海道教育大学小学校英語地域サポート事業　実践成果発表交流会に参加して

１．日程　平成 19 年 2 月 17 日(土)
　　～2 月 18 日(日)
２．会場　道民活動センター
　　（かでる２・７）

３．参加者　小学校教員
４．基調講演講師　管正隆氏
（文部科学省初等中等教育局教科調査官）

Ⅰ．はじめに

1 月の中ごろ学校に来た一枚の案内文書。目に飛び込んだのが「小学校英語」、そして「三浦秀雄先生」。小学校英語は、まだまだ実践が伴ってはいないが、以前に中学校の英語の教員をやっていたこともあり、どちらかというと英語推進派でもあるので、興味を持っていた。また、昨年小学校英語の教員養成講座を受けようとしたが、実習の関係で受講できず、残念な思いをしていた。今年の冬休みに函館大学で行われた小学校英語サークルの会に参加して、改めて小学校英語の大切さを感じたというところである。そのサークルには私の東高校時代の英語の先生である田中久先生も役員を務めていらっしゃい、直々のお誘いということもあり、参加させていただいた。そんなこともあり、「小学校英語」という言葉には敏感になっていたところである。

一方、三浦先生は、私の情報教育関係の恩師にもあたる。三浦先生が渡島教育局の次長だった時代、情報教育研究会で幹事長を務め、五稜郭のほとりの教育局に研究紀要を持って伺ったところ、声をかけていただき、情報教育の大切さ、そして、私のつたない活動であったが、とてもほめてくださった。以来、先生が、本庁時代は、情報の全道組織を作ろうとした時、呼んでいただき、道教委の本丸でコーヒーをいただいたこと、道研の所長時代には渡島情報教育研究会の 10 周年で記念講演をいただいたこと、また、先生が教育大の理事になられて、私が大学院生をしている時、大学のあり方などでメールのやり取りをしてくださった。私にとっては大きすぎる方ではあるが、いつもニコニコと私に声をかけてくだ

さっている。

そんなわけで、休日でもあるし、思い切って参加の申し込みをさせていただいたという経緯である。

Ⅱ．内容のまとめ

管先生も講演から

小学校英語が導入されるかどうかについては、今のところは正式に決まっていない。しかし、時としてマスコミが先に走ることもある。2005 年 10 月 17 日の 19 時のＮＨＫニュースでいきなり、「小学校英語が必修」とテレビで流れた。その時は、役所で仕事をしていた。そのニュースを見てただ

ただ驚いた。小学校英語をどうするか決める本丸は誰もそのことを知らなかったのである。報道関係者が次々と自分達の部屋に押しかける。そして、そのニュースが間違いであることを知らせた。ＮＨＫは 22 時のニュースで謝罪すると言った。自分達は部屋に待機し、ニュースを見守った。21 のニュースを楽しみにしていたら、まだやっている。まあ、差し替えられないのだろうと、22 時を楽しみに待つ。ところが、謝罪はおろかバージョンアップして、長い時間放送した。最終的にＮＨＫは訂正しなかった。またニュースソースも明かさなかった。

2006 年の 9 月 27 日もたいへんだった。仲間の送別会があり、幹事役で乾杯というところだった。「すぐ戻れ」とメール。何だろうと電車に乗って本庁に戻ると、就任したばっかりの大臣が、いきなり学校英語が必修になるかどうかは、現時点でははっきりしないが、流れとして、小学校高学年の総合に位置づけられるか、低学年も含めて位置づけられるかであろう。

現在、研究開発校全国 70 校に予算をつけ、また特区として 78 箇所を指定し、研究をしているところである。

視察してきたヨーロッパを見るとフランスでは小学校３年生で外国語は必修で、そのうちの 86%が英語、あとはドイツ語である。フランスは母国語を大事にしているといわれるが、イギリスやアメリカの言語というとらえではなく、ツールとしての英語というとらえである。

中国では、2005 年 9 月、小学校 3 年生から英語が必修になった。大都市では 1 年生からやっている。中国の小学校は教科担任制になっており、そういう点では英語も導入しやすい。しかし、広い中国で実際のところ全ての学校が必修化されているとは言えず、当局もできるところからやればいいという考えのようである。

韓国では小学校３年生から英語が導入されている。近々1 年生からになる。韓国は日本と同様に全教科の担任となる。先生方への英語研修は 120 時間行われた。あとは、先生方に試験を課し、優秀な先生の給与をアップするなどの施策をとっている。

台湾では、小学校５年生だった導入が小学校３年生になった。全て必修の教科となっている。

必修となっていないアジアの国では日本とインドネシアぐらいである。

センター試験に英語のリッスニングが入った。100 点満点で北海道は、20 点。全国で一番低かった。これが小学校英語とどう関わるか断定はできないが、一番高い三重の 36 点と比べると大きな差が開いている。

昔、ウィッキーさんの英会話というのがあったが、中学生 5 万人に、英語で道を尋ねられた場合どうするかと聞いたところ、4 割が英語で答える、4 割が日本語で答える、1 割がだまっている、1 割が逃げるという調査結果があるそうである。

ある研究指定校での授業の話である。子どもたちは先生の単語が書かれたフラッシュカードを見て、さかんに発音練習をしている。この学校では卒業時に８割の児童が英語が嫌いだと答えた。小学校の英語の目的を取り違えた、まずい授業であった。現在中学生の 3 割が英語の授業で何をやっているかわからないというデータもある。

小学校の英語教育に関する外国語専門部会の審議状況について

小学校における英語教育の必要性

・小学生の柔軟な適応力を生かすことが可能・グローバル化の進展への対応・教育の機会均等の確保。全小学校の９８％程度が何らかの形で英語指導を実施している。

目標・内容など

英語活動を通して

①コミュニケーション能力の向上を図る。

②言語や文化についての理解を深める。

③英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことをめざす。

※国語力の育成を含め、広い意味での言語能力を高める内容を設定。

※併せて、中・高の内容の改善を図り、聞くこと、話すことなど実践的コミュニケーション能力の充実を図る。

教育課程上の位置づけ

〇小学校高学年

・「領域」または「総合的な学習の時間」としての位置づけを検討

・例えば、週 1 回（年間 35 時間）程度の実施について検討

〇小学校中学年及び低学年

・「総合的な学習の時間」及び「特別活動」等のなかで充実

・教育内容や授業時間数の扱い等については引き続き検討

指導者、教材・教具などの教育条件整備

(指導者)

・小学校教員とＡＬＴ等（留学生や英語に堪能な地域人材など）によるティームティーチングを基本とする方向で検討。

(教材教具)

・導入段階では、国において、教材及び教師用指導資料を作成。

・ＩＣＴを積極的に活用

(条件整備)

・小学校の英語教育の充実には、指導者や教材・教具などの教育条件整備が必須の課題。

これからの小学校における英語活動等国

際理解活動推進プランとして文科省では約6 億円の予算をつけている。内容として、全国に拠点校を 600 校（400 校に１校）を置き、そこを中心に研究を進める。また、文科省主催の指導主事など対象の講習、各都道府県での研修、校内研修と３段階にわけた教員の研修を予定している。

小学校の高学年に位置づけられるとしたら総合的な学習の時間の 1 部に週１時間程度となるであろう。しかしながら、内容に枷をはめないという総合のあり方について、調整することが求められる。低学年で実施するとしたら特別活動（学校行事）となるであろう。現在生活でやっている場合もあるが、それはルール違反である。

各グループの発表

北海道を札幌、旭川、釧路、函館の４つのグループに分け、実践発表を行った。

札幌地区の発表を中心にまとめる。札幌地区は、カリキュラムの作成と実際の授業場面での演習について発表した。

カリキュラムについては、札幌校の先生を中心に①どのような授業を作っていくのか、②どのような学習内容とするのか、③どのように年間指導計画を作るかということについて提言された。

小学校英語の学習内容として次のことをポイントとした

①音声を中心とする。

②子どもの「言いたいこと」「したいこと」を扱う。

③子どもの日常生活に身近なことがらを扱う。

④基本的で応用のきく表現を選ぶ

⑤既知のものでも新たな発見をもたらす話題等を扱う。

⑥外国人の表現や身振りの中から、文化に違いに気づかせる

⑦子どもの発達段階を踏まえた話題・素材・題材を扱う。

札幌では、今までやってきた実践を全て洗い出し、どんな表現が使われたか、どんな単語が登場したかなどのデータを集めて、指導計画を作成していった。かなり完成度の高いものと思う。

また、実際の授業場面では、国旗を集めるゲーム、名前のアルファベットを集めるゲームなど参加者も一緒になって楽しんだ。どちらかというとただ座っているだけの研修会が多い中で、初めてお会いする方とも気軽に、私のへたくそ英語を使いながらにこやかにコミュにケーションができてとても楽しかった。

子どもたちにとっても、ゲームは楽しい。アイスブレーキングという手法だが、初対

面の子どもたちでも、ちょっと抵抗はあるかもしれないけれど、こんなゲームを通して、肩の凝らない雰囲気作りって大切なものだなあとつくづく思った。

最後に札幌地区で中心に活動されている女性の先生のお誕生日ということで、全員でハッピーバースデーを終わり、発表の全てを終了した。たいへん和やかな研修会であった。

最後に

小学校英語については、様々な問題を抱えている。代表的なのが、①何のために英語をやるのか理解できない②学級担任が指導しきれない。③何を教えていいのか指導計画がはっきりしていない。これらはどこの発表でも感じられた。そして、どの発表もこれらをクリアする工夫がなされていた。附属小では、比較的学校体制として教育課程に組み込むことが容易であろうが、公立諸小学校においては、そのトップダウンでもない限り、推進の中心になる先生が、草の根で少しずつ仲間を増やして、研究を進めながら、自らも少しずつ実践して、それが校内体制に広がっていくという形が多いようである。

私自身、中学校で成績処理の電算化、小学校においても、職員室ネットワーク、公文書の電子化、ファイルの共有化、情報教育の実践など、どちらかというと先進的な取り組みをしてきた。その全てが、すぐにうまくいったわけではない。それぞれに今までのことを変えるということに対する抵抗があり、当初はうまく受け入れてもらえず、部分的なスタートからしたものもあった。しかしながら、その試みが教育の情報化に寄与するものであり、実際にやってみると非常に良いものであることがわかってくると、次第に受け入れられてくるものである。また、子どもたちもついてくるものである。

小学校英語については、教師の７割は二の足を踏んでいるというが、保護者の７割強は、期待しているというデータが出ている。また、今まで小学校でのＡＬＴ活用、国際理解教育に関しては、子どもたちも目を輝かせながら取り組んでいるという私の経験もある。

私は、これからの世代を生き抜く子どもたちには、英語とコンピュータ、これは是非身につけさせたいスキルと考えている。

この冬の函館大学での研修、そして今回の札幌での全道研修で得たものを整理して、理論的にも筋道をたててお話できるように

計画を整備しながら、校長の経営方針に即した形で提案し、本校においても、時代の求める教育を実践していきたいと思う。